

SHOUBUZAWA-A SITE

菖蒲沢 A 遺跡

— 平成 7 年度県営圃場整備事業堀地区に
伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1996. 3

茅野市教育委員会

菖蒲沢 A 遺跡

— 平成 7 年度県営圃場整備事業堀地区に
伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1996. 3

茅野市教育委員会

序 文

菖蒲沢A遺跡は、この度、県営圃場整備事業堀地区の実施に伴い、記録保存を前提に発掘調査を茅野市教育委員会が行ったものです。

堀地区の圃場整備事業に伴う発掘調査は平成3年度より行われ、数多くの成果がありました。当遺跡の南側に位置しています国指定特別史跡尖石石器時代遺跡や弓助尾根南遺跡、また、平成5年度に調査が行われました立石遺跡などの大遺跡があり、これらの遺跡との関連性が注目されます。

今回の調査は、平成6年度に行われました第1次調査に引き続いての調査です。前回の調査では縄文時代前中期、中期初頭、後期前半までの土坑群が発見されました。

また、遺物は早期よりみられ、今回調査した遺構にも前回と同様の早期の上器片が出土しています。遺構は前回の調査では、発見されていなかった縄文時代中期後半の住居址が1軒検出され、その周辺からは多量の上器片の散布が発見されました。

また、この他に平安時代の住居址も1軒検出されました。近年は八ヶ岳西南麓地方でこの時期の住居址が発見されることが多く、今回の調査では、あきかわはざ麻皮剥器といった生業に関わる遺物も検出されました。以上の成果が考古学、地方史研究に十分に活用され、また、今後の埋蔵文化財保護のために役立つことを切望します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの各関係機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力また、発掘調査に関わった多くの皆様のご尽力により、調査を無事終了し、ここに報告書を刊行することができますことに、心から御礼申し上げます。

平成8年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角 徹郎

例　　言

1. 本書は、長野県課訪地方事務所長大西一郎と茅野市長原田文也との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成8年度県営園場整備事業湖東地区に伴う、長野県茅野市湖東堤芦蒲沢八遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県課訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助並びに県費補助金を得て、茅野市教育委員会が平成7年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第2節4として記載してある。
3. 発掘調査は平成7年5月24日から8月3日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成8年3月まで茅野市文化財調査室に於いて行った。
4. 本書の執筆は柳川英司が行なった。
5. 調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第VIII系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
6. 本報告に係わる出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財調査室で収蔵・保管されている。

目　　次

序　文	茅野市教育委員会　教育長　両角徹郎
例　言	
目　次	
第Ⅰ章 発掘調査の概要	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の方法と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の概観	4
第1節 遺跡の立地と地理的環境	4
第2節 遺跡の位置	8
第Ⅲ章 発掘された遺構と遺物	10
第1節 遺跡の層序	10
第2節 発掘された遺構	12
1. A区の遺構	12
2. B区の遺構	17
第3節 出土した遺物	27
1. 縄文時代の遺物	27
2. 平安時代の遺物	31
第Ⅴ章 結　語	32
団　版	
抄　録	

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査に至るまでの経過

平成6年12月 「平成7年度文化財関係補助事業計画書」を提出し、3,350m²を県営圃場整備事業地区に伴い緊急発掘調査を行うことになった。

平成7年2月20日 6教文第7-11-1号「県営圃場整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について(通知)」で長野県教育委員会より通知され、事業費8,800,000円(農政側負担7,744,000円・文化財負担1,056,000円)で発掘調査を行う事になった。

平成7年3月28日 7教文第109-9号「平成7年度県営圃場整備事業地区菖蒲沢A遺跡の埋蔵文化財発掘調査の通知(第98条の2第1項)」の通知を長野県教育委員会文化課長宛に提出

平成7年5月15日 平成7年5月1日付埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書により長野県地方事務所長と発掘調査業務委託の契約を7,744,000円で締結。

平成7年6月7日 7教文第1号「平成7年度文化財関係圃場事業について(通知)」

平成7年6月16日 7教文第2号「平成7年度文化財補助事業補助金の内示について(通知)」

平成7年6月22日 7教文第20-2号「平成7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出」

平成7年6月30日 7教文第23-1号「平成7年度文化財保護事業補助金申請書(県費)」提出

平成7年9月27日 7教文第1号「平成7年度文化財関係圃場補助事業の交付決定について(通知)」

平成7年9月27日 7教文第2号「平成7年度文化財保護事業補助金の交付決定について(通知)」

平成7年11月24日 7教文第80-2「平成7年度市内遺跡発掘調査補助金変更承認申請書」提出

第2節 調査の方法と経過

1. 調査区の設定

試掘調査によって調査区を設定し、遺構の広がる部分を重機を用いて表土除去を行った。この結果、木構造面積は3,590m²となった。これは菖蒲沢A遺跡全体の1/3にあたり、平成6年度調査分の1,380m²と合わせて1/2を発掘したことになる。遺構の立地の状況から、調査区を2ヶ所に分け、北側をA区、南側をB区とした。

グリッドについては、調査範囲内に設定し、遺構の記録、遺物の取り上げの基準とした。グリッドの基準は、公共座標x=1690、y=-24000を基準点とし、この基準点からA・B区とも一辺10mのグリッドを設定した。ベンチマークは1043.308mを設定した。

2. 発掘調査の経過

平成7年5月24日より遺跡の範囲を確認するための試掘調査と、表土剥ぎを重機により行う。試掘調査を行ったのは、平成5年に実施した試掘調査の行われていなかったB区の東側と西側である。この結果、遺跡の東側に平安時代の住居址が1軒検出された。A区は住居址1軒と方形柱穴列1基、集石1基、焼土址2基、土坑が検出されたが、遺物がA区のほぼ全面で検出されたため調査区がかなり西方まで伸びることになった。発掘調査は、土器が多く散っているA区の遺構確認に時間がかかったが、遺構を検出することはできなか

った。遺構図化の短縮と省力のため8月1日に航空測量を行った。発掘調査が終了したのは8月3日である。

3. 調査日誌（抄）

- 5月24日 A区の表土剥ぎと表面採取を行う。表探はA区中央で多く拾うことができる。新たにA区西端においても土器片を採取することができた。表土剥ぎはA区西端より行い、A区西端で15cmほどの黒曜石製のスクレイパーと縄文中期後半の土器片が出土している。
- 5月25日 昨日スクレイパーなどが出土した地点の周辺で遺物の散布が見られる。縄文中期後半の土器片の他、平安時代土器片が数点見られた。
- 5月26日 B区の表土剥ぎを行う。確認できたのは平安時代の住居址1軒と土坑1基である。
- 5月30日 A区a・b-4・5グリットで遺構確認を行う。ここは、縄文中期後半と平安の遺物が見られる。これらの遺物は道路敷の下に存在していたと考えられる遺構に伴うものであろう。
- 6月5日 B区の東側を土置場にする予定で遺構確認を行ったところ、平安時代の住居址を1軒検出した。尾根のはば中央部に位置している。
- 6月6日 B区1号住居址の発掘を始める。
- 6月7日 B区1号住居址の発掘を行う。焼土址が住居址内東側で検出され、この付近より麻皮剥器が出土している。また、遺構に伴ってはいないが、打製石斧が出土している。
- 6月8日 B区1号住居址のベルトのセクションを取り、ベルトを外す。灰釉陶器、土師器、黒色土器の壺、碗、皿、羽釜が確認できる。
- 6月12日 A区の東側より多くの土器が検出され、その中よりA区焼土址1が検出された。B区1号住居址の撮影と遺物の取り上げを行う。
- 6月20日 B区1号住居址のかまど内から遺物が多く検出された。竈前部の土坑から大きな軽石が出土している。また、焼土址1より遺物が多く出土している。住居址のはば中央に、不整形な土坑らしき遺構があり、この遺構中にピットらしいプランが数基見られる。
- 6月21日 B区は東側に土坑が展開している。これらの土坑はプランが明確ではなく、土層はだいたい三角堆土を示す。しかし、壁面は明確でないものが多い。
- 6月22日 1付近から直径50cm大の楕円形の土坑が検出されたが、出土遺構がほとんどなく、時期の決定が難しい。
- 6月26日 ぐずついた天気が続き、1日に何回も作業が中断した。
- 6月27日 B区1住の竈の横から土坑が検出され、土坑中より土師器壺が検出された。
- 6月28日 A区は遺跡の範囲が不明確なため、トレチを入れたが、ある一定のレベルより下から遺物の検出が見られなくなる。しかし、遺構は確認できていない。縄文中期後半の住居址を1軒検出した。
- 6月29日 B区1住のはば中央に1.5m程の床下土坑が検出された。この中には4基程ピットが掘り込まれていた。A区は南北方向にトレチを入れるが、何も検出できていない。
- 6月30日 A区b・c-14・15グリットは土器が多く検出されるが、遺構は確認できない。
- 7月11日 A区1号住居址の発掘を始める。住居址内より7×10cm大の黒曜石が出土する。
- 7月12日 雨のため午前中で作業を中止する。
- 7月13日 A区1住の発掘を行う。炉の北側より未焼成の粘土を検出した。住居址は南側の道路によって2/3程切られている。

- 7月17日 A区b-13から住居址の炉ではないかと考えられる遺構が検出されていたが、集石となつた。半大の礫が楕円形に積み重なり、中には焼石が見られる。また、A区の最東部より黒曜石が多く検出された。
- 7月18日 A区最東部で土器や黒曜石の散布が見られたが、遺構が確認できず耕作による擾乱を受けていた。
- 7月24日 写真測量の打ち合わせのため、昭和株式会社の戸崎技師が来訪。A区a・b-4・5グリット付近よりかなりの量の遺物が検出された。
- 7月26日 A区a・b-4・5から集石らしき遺構が検出された。
- 7月27日 A区a・b-4・5の道路際より平安時代の土器片が多く検出された。
- 7月28日 訪問地方事務所：地改良課主催の建設現場代理人研修会を当遺跡で行う。
- 8月1日 航空測量を行う。
- 8月3日 現場の撤収作業を行い、発掘作業を終了する。

4. 調査組織

調査主体者 両角昭二（平成7年4月1日～平成7年9月30日）・両角徹郎（平成7年10月1日～）
(教育長)

事務局 宮下安雄（教育次長）

文化財調査室 両角英行（室長） 鶴岡幸雄（係長） 守矢昌文 小林深志（尖石考古館学芸員兼務） 大谷勝己 小池岳史 功刀 司 百瀬一郎 小林健治 柳川英司
大月三千代

調査担当者 柳川英司

調査補助員 伊藤千代美 占部美恵 田中慎太郎

発掘調査・整理作業協力者

伊藤京子 占部美恵 太田友子 岡 和宣 金子清春 北原きよゑ 久根種則 小平千恵子
小平長茂 小平ツギ 小平三行 小平義市 清水太助 清水つるゑ 清水豊一 清水みゑ
武居八千代 武田けい子 立岩貴江子 長田 真 花岡照友 林 端之 原ちよ子 堀内 淳
柳平洋子 吉田淑子

基準点測量：株式会社 嶺水

遺構測量委託：昭和 株式会社

遺物実測委託：株式会社 東京航業研究所

第II章 遺跡の概観

第1節 遺跡の立地と地理的環境

芦蒲沢A遺跡は茅野市豊平4734-2693番地他に位置する。遺跡の南西方向には南大塙地区があり、北西方向には堀地区がある。堀地区はJR中央本線茅野駅から東北東約8kmに位置している。遺跡の東側には森がせまり、別荘地である二井の森がその森の中にある。さらにその東側は広見地区である。

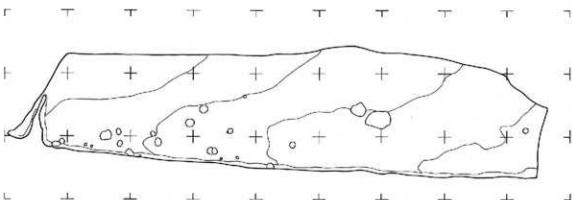
東側の森の中には南大塙地区で祀る「狐之宮」の祠がある。祠自体は平成4年に建立された新しいものであるが、祠の傍らに「狐石」と呼ばれる石があり、これが御神体となっているようである。地元の方の話によると、かつては「山の神」であったようで、享保3年(1733)作成の『旧諏訪藩主手元絵図』では遺跡周辺に山の神が見える。

また、北側には芦ヶ沢地区がある。遺跡の周囲の状況は近年の圃場整備事業により一変し、広大で平坦な田地と畠地が広がっている。圃場整備以前は小規模な田畑が階段状に広がっていた。今回の発掘でA区としたところは最近開墾された場所であり、それまでは松林であったという。

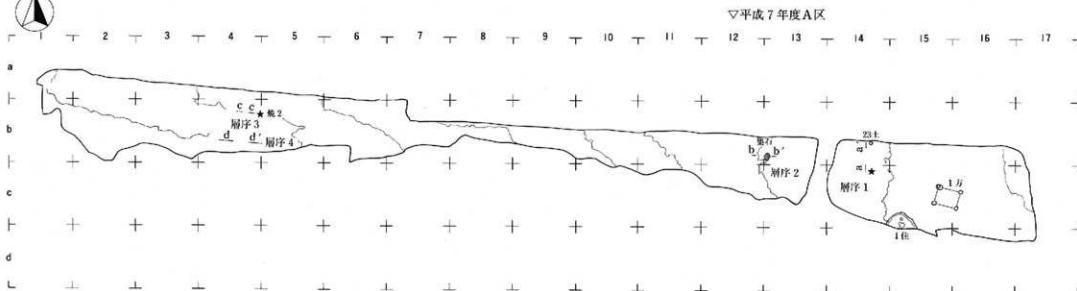
本遺跡は八ヶ岳の火山活動によってつくられた山麓斜面が小河川の浸食によって削出された小規模な尾根状台地に立地している。遺跡の周辺にはこのような手状に伸びる小規模な尾根状台地の背中の部分に展開している小規模な集落であることが考えられ、その主な部分は台地のはば中央部を中心に広がっていたのではないかと想定される。今回発掘した区域は尾根の頂を東西方向に走る道路敷の南側とその南側の台地であり、芦蒲沢A遺跡全体の約1/3の3,590m²で、昨年度発掘を行った箇所を含めると4,970m²となり、遺跡全体の1/2を発掘したことになる。

A区の占地する台地の南側の地形はかなりの急斜面であり、途中でくびれて台地は狭くなり、それより東側は台地がやや広くなる。昨年の発掘区は緩やかに北側に傾斜している。A区の北側には現在でも使用している沙が流れている。沙が近い場所は湿気がとても強い。A区の東北側の林の近辺には小規模ながら湿地が広がっている。

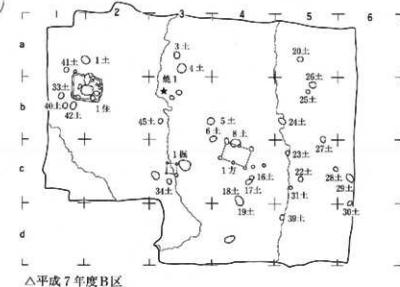
B区はA区の南側の尾根状台地に位置している。B区の尾根はA区に較べて広くて平坦であり、特に広くなっている場所の台地の頂部を中心として遺構が展開している。A区とB区の間には深い谷があり、小河川が流れている。この谷部も湿地となっている。B区の南側は平坦で国指定特別史跡尖石石器時代遺跡へと続いている。遺跡の周辺にある湿地は古くからの水の供給源の一つではなかったかと推察される。



★焼土址

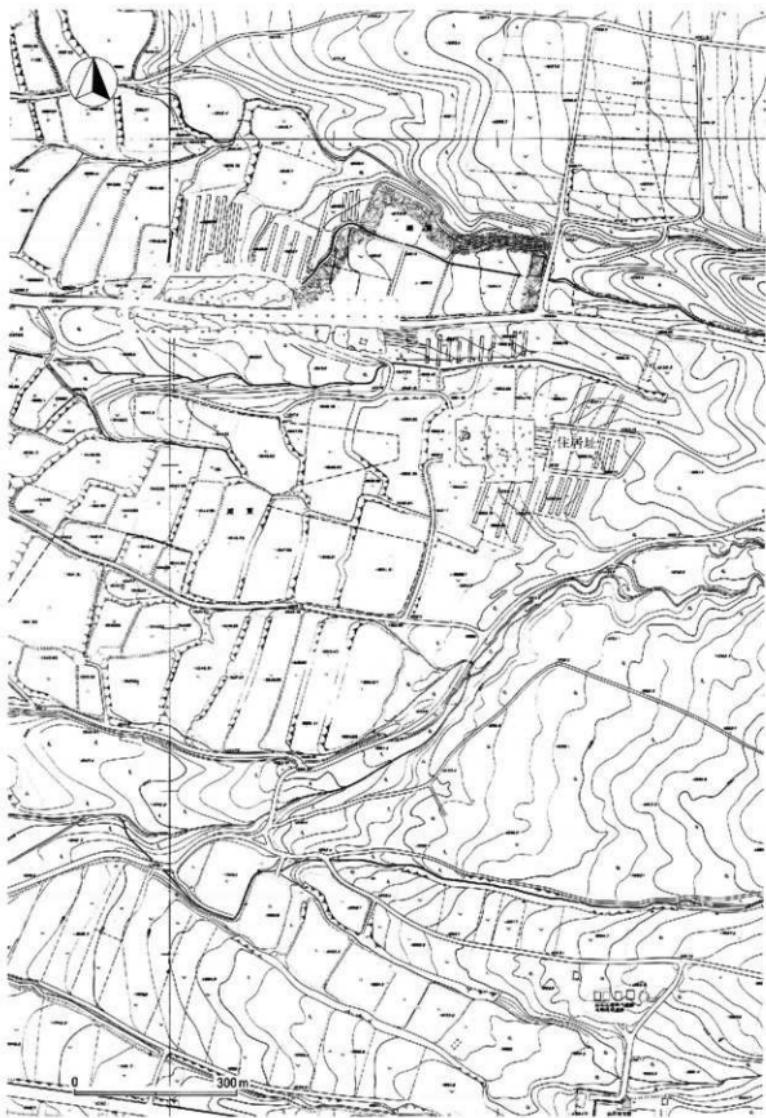


平成7年度B区



第1図 菖蒲沢A遺跡全図 (1/600)

0 20m



第2図 菖蒲沢A遺跡の地形と発掘区 (1/3,000)

第2節 遺跡の位置

1. 第1次調査の概要

第1次調査で検出された遺構及び遺物は縄文時代と近代である。縄文時代の遺構はすべてが土坑であるが、遺物の出土が少ないため、時期を確定できる土坑は少ない。このうち前期前半の土坑が1基、前期後半の土坑が2基検出され、残りの17基は形態から縄文時代と考えられるものの、時期は不明である。遺物は縄文時代早期の押型文土器と前期前半・前期後半の諸穀C式期と十三菩提式期の土器、後期前半の幅之内I式期の土器と、黒曜石片が出土している。このうち諸穀C式期と十三菩提式期の土器は土坑の中より検出されているが、早期押型文と後期の土器は遺構から検出されていない。

2. 周辺の遺跡

堺地区は平成4年度からの圃場整備事業により大変多くの遺跡が発掘された。菖蒲沢A遺跡の500m南には国指定史跡尖石石器時代遺跡があり、西側1.4~2.4kmに立石・城・水尻・中ッ原A・B・珍都坂A・Bがあり、いずれも近年の県営圃場整備事業により発掘されている。また、遺跡の北側には、隣接するかたちで菖蒲沢B遺跡がある。さらにその北側は1.4kmおいて芹ヶ沢地区に至るが、この間は遺跡の空白地帯となっている。芹ヶ沢地区には広井出遺跡(236)や神ノ木遺跡(53)があり、縄文時代前期前半の住居址が発掘され、縄文時代早期の土器も検出されている。また、この付近には前期前半の神ノ木式土器の標識遺跡である神ノ木遺跡(53)や前期後半の下島式土器の標識遺跡である下島遺跡などがある。神ノ木遺跡では昨年度の試掘調査により縄文時代前期の大規模な集落址が確認されている。これらの遺跡の概略を以下に述べていただきたい。

与助尾根・尖石遺跡(85・87) 国指定特別史跡。明治26年以來調査が行われ、現在まで確認調査が行われている。確認された遺構は平成6年までの調査で縄文中期の住居址が両遺跡併せて98軒と土坑が数多く検出されている。出土遺物は縄文時代中期を中心とするが、早期の土器片や、平安時代の遺物も見られる。

立石遺跡(80) 平成5年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構は縄文時代中期後葉から後期前半までの住居址が35軒、方形柱穴列17基、土坑(報告書では「穴」)が1524基、配石遺構3基、平安時代の住居址1軒などが検出された。出土遺物の中には土偶の出土もみられた。

城遺跡(81) 平成3年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構は縄文時代中期前半の藤内I式期の住居址2軒、中期初頭と前半の土坑27基、平安時代の住居址2軒が検出している。遺物は縄文時代早期・中期初頭・中期前半の土器及び石器と平安時代の土器片が出土している。

水尻遺跡(82) 平成3年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構は縄文時代中期前半菖沢式期の住居址1軒と中期前半を含むと考えられる土坑7基である。遺物は縄文時代早期末・中期初頭・中期前半が出土している。

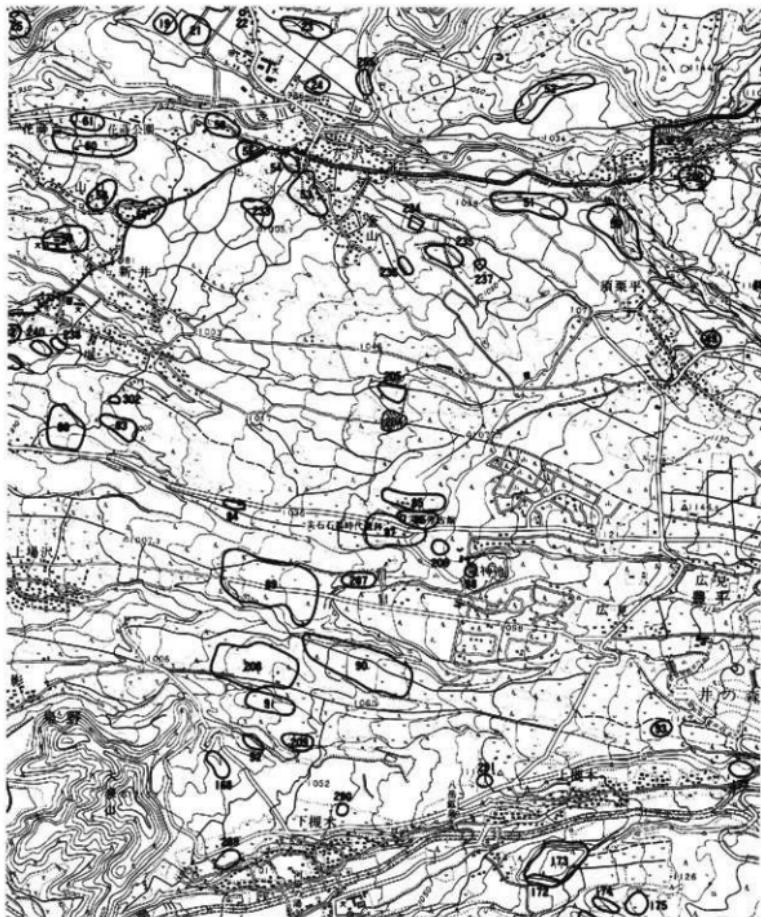
中ッ原A遺跡(83) 平成4年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構は縄文前期初頭の住居址1軒、縄文時代後期前半の住居址が1軒、方形柱穴列3基、平安時代の住居址が1軒、また、時期不明の土坑が数基である。

与助尾根南遺跡(86) 昭和30年と平成5年に尖石考古館建設などにより発掘された。検出された遺構は縄文時代前期の住居址1軒、中期後半の住居址7軒、落し穴3基、土坑1基、特殊遺構、平安時代の住居址1軒が検出された。遺物は縄文時代早期押型文や前期前半・中期後半の土器が出土している。

中ッ原B遺跡(302) 平成4年度の県営圃場整備事業により発掘された。遺構は発見されなかったが縄文中期後期の土器片や石器と中世・近世の陶器片が検出された。

珍部坂A・B遺跡(238・240) 平成3年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構は縄文時代中期前半藤内I式期の住居址1軒と、時期不明の土坑が1基である。遺物は縄文中期前半の藤内I式期の土器片と土偶、石器、平安時代の土師器片、中世の内耳土器片が出土している。

菖蒲沢B遺跡(205) 未発掘の遺跡である。平成3年度作成の『茅野市遺跡台帳』によると、縄文時代中期後半の土器片となるが実態は不明である。



第3図 菖蒲沢A遺跡位置図(1/25,000)

第III章 発掘された遺構と遺物

第1節 遺跡の層序

A区は道路の南側が急傾斜となっており、B-13グリットより西側は耕地ではなかったため耕作による搅乱は少ない。b-4・5グリットでは一部抉られているように地山が切れており、この部分に黒色土が堆積していた。掘り下げてみると礫が集中している箇所が検出された(層序4)。また、礫の上面より多くの土器や石器の破片が検出された。礫の周辺の土層には擾乱の痕跡は見られず、礫もまとまりがなく広い範囲で広がっているため、人为的に集められたものではなく、淀入したものであることが考えられる。

A区b-14より東側は、畠地であったため耕作による搅乱を受けていた。特に最東部の南側の斜面は搅乱がひどく、遺物の散布は見られたが遺構を確認することはできなかった。層序1の周辺は大量に土器片や黒曜石片が散布しており、これらの遺物はほとんどが、層序1の第2層中より出土しているため、遺物の包含層は第2層であることがいえる。

層序2のあるb・c-12・13付近も、大量の土器片や黒曜石片の散布が見られた。集石の山上にいる付近は、かつて道路が造られたため、かなりの搅乱を受けていたが、集石の出土している部分は辛うじて搅乱から逃れていた。遺物の包含層及び、集石の包含層は層序3の第1層中であることが考えられる。

B区は尾根状台地の背中の部分に当たり表土がとても浅く、遺構のすぐ上面まで耕作が及んでいた。

層序1

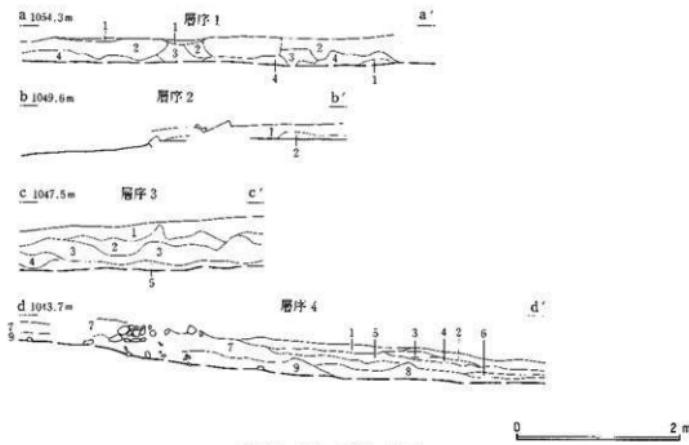
- 1 黒色土 ローム粒子を少量含む。粘性あり、しまりなし。
- 2 暗褐色土 ローム粒子、5mm大の炭化物を少量含む。粘性あり、堅緻。
- 3 喀茶褐色土 ローム粒子、5mm以下の炭化物を少量含む。粘性、しまりあり。
- 4 喀茶褐色土 ローム粒子を多く、5mm以下の炭化物を少量含む。粘性、しまりあり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。粘性、しまりあり。

層序2

- 1 黒色土 ローム粒子を少量、10mm大のロームブロックを稀に含む。粘性あり、堅緻。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子を多く含み、10mm以下のロームブロックを少量含む。粘性、しまりあり。

層序3

- 1 表土
- 2 黒色土 ローム粒子を少量と30mm以下のロームブロックを少量含む。粘性、しまりあり。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を多く、30mm以下のロームブロックを少量含む。下部より白黄色のバミスの出土がみられる。



第4図 遺跡の層序 (1/60)

層序 4

- 1 黒色土 ローム粒子を少量含み、10mm大のロームブロックを少量含む。しまり弱く粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を1より多く含む。粘性あり、しまり弱い。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。しまり弱く粘性あり。
- 4 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまりはやや堅いが脆く、粘性あり。
- 5 暗褐色土 やや赤みがかる。ローム粒子を少量含み、5mm以下のロームブロックを少量含む。しまり弱く、粘性あり。
- 6 暗褐色土 やや黄色みがかる。ローム粒子を5より多く含み、10mm大のロームブロックを稀に含む。しまり弱く粘性あり。
- 7 黒色土 ローム粒子を少量含み、10mm以下のロームブロックを多く含み、軽石を少量、半大的礫を多く含む。しまり堅く、粘性あり。
- 8 暗褐色土 黄色みがかる。ローム粒子を多く含む。粘性あり、しまり弱い。
- 9 暗褐色土 黄色みがかる。ローム粒子を多く含み、20mm以下のロームブロックを多く含む。粘性あり、しまりはとても堅い。

第2節 発掘された遺構

1. A区の遺構

A区は縄文時代の住居址1軒、方形柱穴列1基、集石1基、土坑1基、焼土址1基が検出されている。また、平安時代の遺構も存在し、焼土址が1基検出されている。

1号住居址（第5・6図、図版1-5・6）

全長の約半分を南側の道路によって破壊された住居址である。推定で輪線はN-45°-Eと考えられる。平面形は北西側の隅がやや角張る点などから考えると隅丸方形を呈するものと考えられる。なお、炉よりの位置から推定するとやや北西-南東方向に長い長方形であることも考えられる。

壁の掘り方は斜面に構築されているために明瞭に検出できなかったが、もっとも深く掘り込まれている北側掘り方から類推すると割合直に近い掘り方を有していたと思われる。周溝は割合掘り方のしっかりしていったものが全周し、北西側で14cm、奥壁に当たる北東側では15cmの深さを測る。周溝の幅は北西側で12cm、北東側では26cmを測り、北東側が幅広いものとなっている。

主柱穴と考えられるものはP₁が北側コーナー部分よりやや内側に入った位置に検出された。深さは55cmで、しっかりした掘り方で直に近い立ち上がりを持つ。P₁の上面にはバミスを含む火山堆積物が風化して粘土化した土層が34cm×30cmの範囲に認められた。柱穴上に堆積されていた点より、本址の廃絶時にこの土層が投げ込まれたものとも考えられる。P₁内深さ19cmより中期後半曾利V式期の同一個体の深鉢大破片が傾いて検出された。

ローム面を直接床としており、全面が堅緻であった。P₁周辺の102cm×50cmの範囲が他の面よりもやや高まりを持っていた。

炉址は住居址中央部より、やや奥壁によった位置に構築されている。石圓い炉址で、南辺の炉石が欠落している他は完存し、全体的にしかりした組み方がなされていた。平面形は東西方向にやや長い不整形を呈し、奥壁部に当たると思われる、北側のが石は長さ50cmの板状の大きな安山岩をほぼ垂直に立てている。他の辺に用いられている炉石は奥壁部に較べ、小形で棒状の安山岩が使用されている。なお、西辺の炉石は加熱により破損している。北東・北西側には小砾が認められ、これらは炉石の固定のために詰め込まれたものである。炉址の掘り方は88cm×64cmの不整形円形であり、この掘り方の外周には炉石を固定したと思われる溝状の掘り方が検出されている。炉内には焼土が堆積し、炉底には厚さ5cmの焼土が堆積している。炉の輪線は本来住居址主軸線と同一の方向をとるのが一般的であるが、本跡の炉の輪線は住居址の輪線に対し約44°北側に振れている状況である。

本址からの遺物は、覆土内より検出され、これらの平面分布を見た場合、北側の範囲に散布する状況が見える。ほとんどが土器片であるが、第6図2の打製石斧の破片（3）、四石（4）、黒曜石石核（5）や、黒曜石の剝片などの石器類も出土している。土器は第6図1の沈線によって区画された中に矢羽状の沈線が施されたものと、2の沈線によって区画され、その中に縄文が施されたものがある。1は曾利系の土器であり、2は加曾利E系の土器であると考えられる。

本址の時期は出土遺物より縄文中期後半と考えられる。

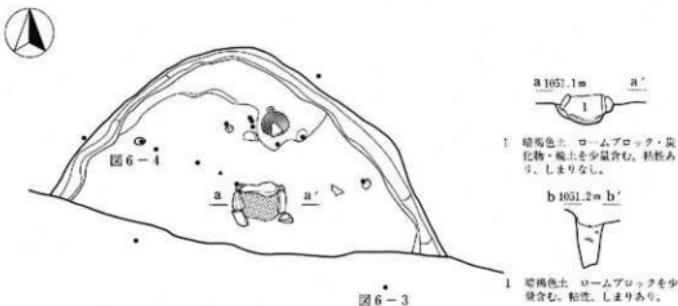
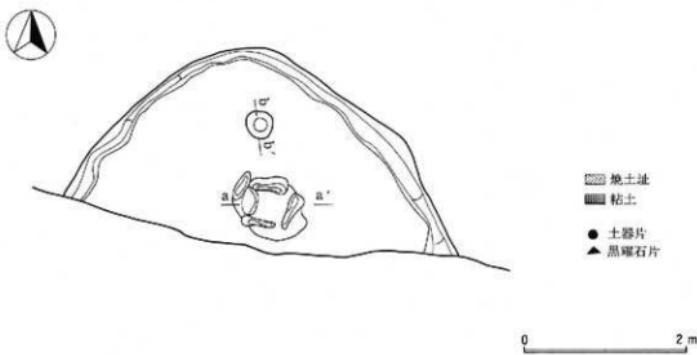


図 6-3



第5図 A区1号住居址 (1/60)

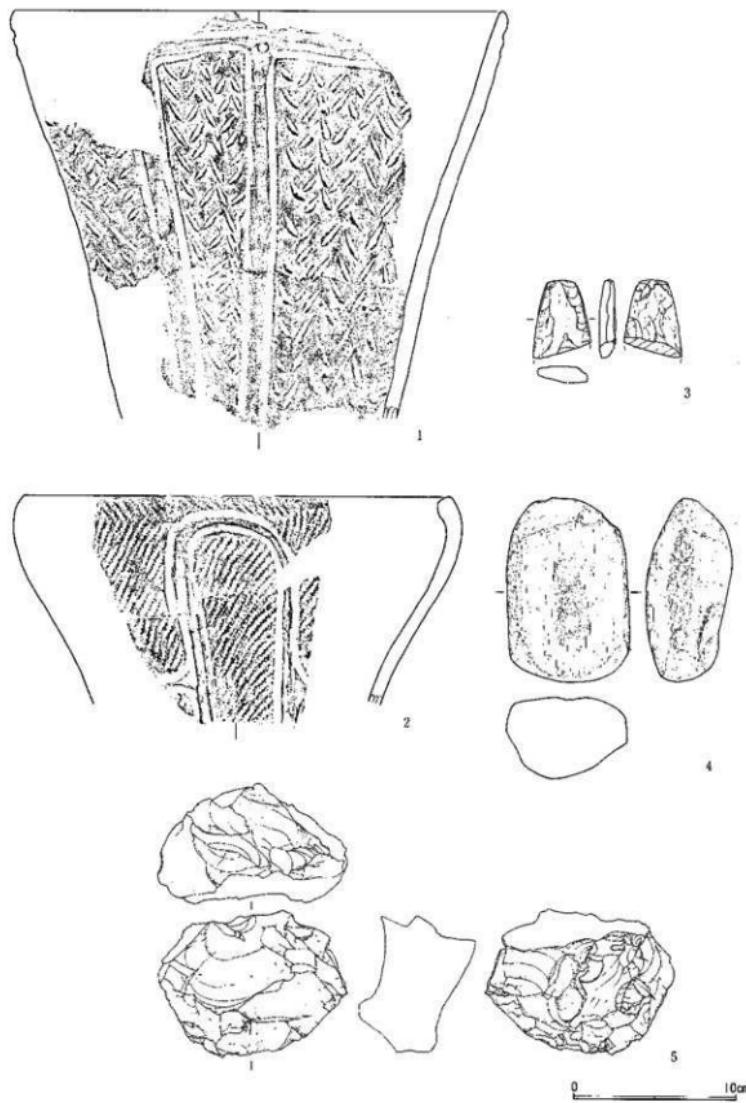
I号方形柱穴 (第7図、図版1-7)

A区b-15・16グリットを中心とする位置に構築されている。

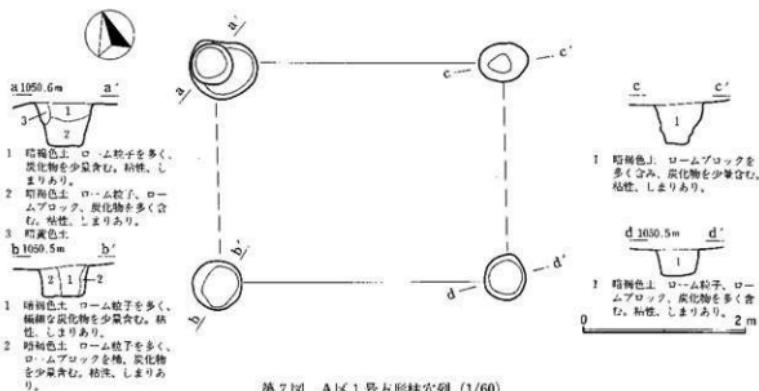
本址の平面形は長方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、長辺となる北辺が3.60m、南辺が3.50m、短辺となる東辺が2.68m、西辺が2.74mを測る。各辺とも均等の長さである。面積は約9.62m²を測る。東から西の方向へ長軸をもち、長軸方向はN-75°-Eを示す。

柱穴はP₁からP₄の4本で構成される。柱穴の平面形すべてが円形といえるが、P₁の平面形は不整形であるが、底面型は円形となっている。確認面からの柱穴の深さは、P₁が53cm、P₂が36cm、P₃が49cm、P₄が32cmで、4本の平均は約42.5cmである。南辺の柱穴は急な斜面に構築されているため、北辺の柱穴に較べると浅くなっている。土層は單一層のものが多いが、P₂では土層で柱痕を確認することができた。

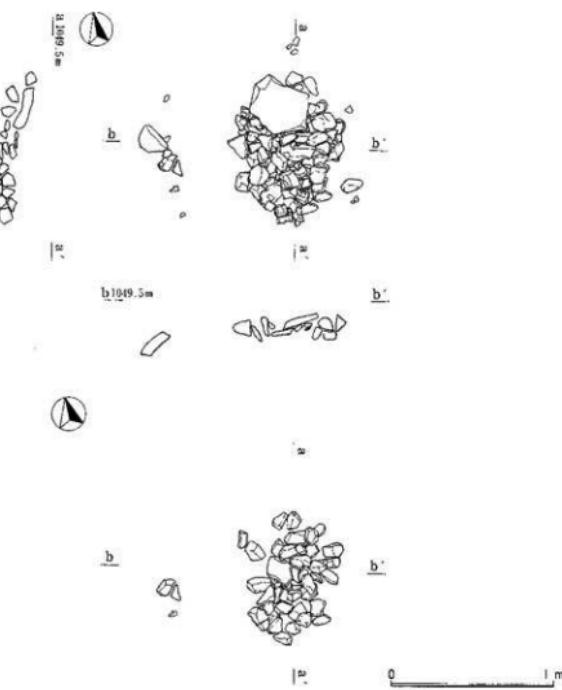
遺物は確認できなかったが、土層と周囲から出土した遺物から考えると、縄文時代中期後半の遺構であると考えられる。



第6圖 A區1號住居址出土遺物 (1/3)



第7図 A区1号方形柱穴列 (1/60)



第8図 A区集石 (1/30)

集石（第4・8図、図版1-8）

A区b-13グリットの西に寄る位置で検出された。図4を見ると第1層の黒色土中より検出された。平面形は長楕円形で長軸95cm、短軸72cmを測る。石は24cmの高さで、約2段にわたって積まれている。集石に使用されている石は、ほとんどが拳大の安山岩が使用されているが、中には黄色の軽石が使用されている例が見られる。また、全体に焼成を受けていた。一つだけ42cmの大きな安山岩が最上部にある。石をすべて取り上げると60cmの範囲で炭化物が散布していた。

集石の内部からは遺物は検出することはできなかったが、周囲より縄文時代中期後半の土器片が散布しているため、この時期の遺構であることが考えられる。

23号土坑（第9図1）

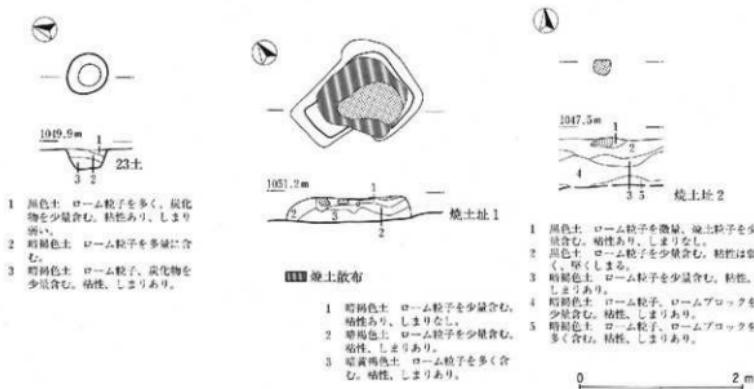
A区の土坑は平成6年度の調査区との関連により土坑番号を継続番号とした。A区b-14グリットに位置する。長径53cm、短径48cm、深さ23cm、平面形は円形で、ピット状の土坑である。内部より遺物の出土はないが、土層と周辺より出土している遺物より縄文時代中期後半の土坑であると考えられる。

焼土址1（第9図2、図版2-1）

A区c-14グリットの北寄りに位置する。83cm×43cmの範囲で焼土が検出された。また、焼土の周囲より111cm×950cmの範囲にわたって焼土の散布する。同レベルより多量の縄文時代中期後半の土器片が検出されており、本址は遺物の包含層中に含まれる遺構であるといえる。よって時期も同時期であると考えられる。

焼土址2（第9図3、図版2-2）

A区b-4・5グリットの北寄りに位置する。22cm×18cmの範囲で焼土が検出された。同レベルより第22図3の黒色土器高台付他、土師器环や灰陶陶器碗といった数点の平安時代の土器片が検出された。本址は道路敷のすぐ脇より検出されたため、周囲は擾乱をひどく受けている。住居址のカマド火床部である可能性が考えられる。



第9図 A区検出遺構 (1/60)

2. B区の遺構

B区からは平安時代の住居址1軒、焼土址1基、绳文時代の方形柱穴列1基、近世の掘立柱建物址1基、土坑30基が検出された。

第1号住居址（第11・12図、図版2-5・6）

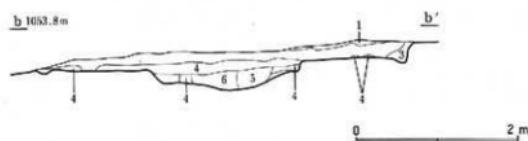
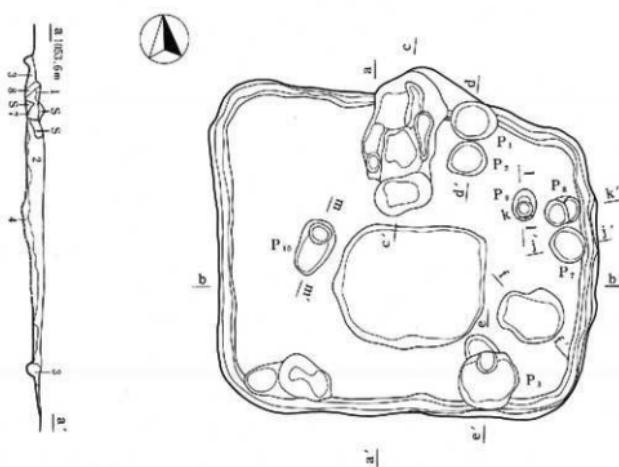
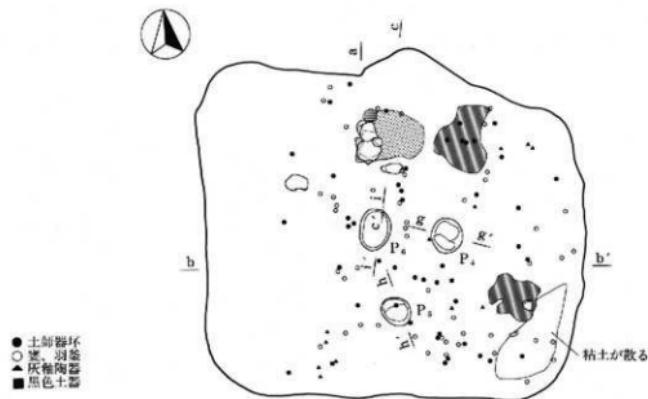
検出状況 長軸3.96m、短軸4.7m、平面形は隅丸長方形のプランを持つ住居址である。輪線方向はN-11.5°-Eである。壁は北側の一部が耕作による搅乱を受けている他は比較的しっかりしている。壁高は北壁12cm、東壁26cm、南壁17cm、西壁7cmで、地形に沿って西壁が低く残存状況は悪い。壁際より周溝が検出され、全周している。

1層は8層に分層できた。1層は暗褐色土で少量のローム粒子を含み、粘性が弱く、しまりがない。耕作土と考えられる。2層は暗褐色土で、少量のローム粒子を含み、粘性があり、しまりがある。一部に焼土の散る所が見られる。3層は暗褐色土でローム粒子が多く含み、粘性としまりがある。4層は暗茶褐色土で少量のローム粒子を含み、粘性があり、しまりは弱い。5層は暗褐色土でローム粒子を多く、10mm大のロームブロックを少量、2mm大の炭化物を少量含む。粘性がありしまりはやや弱い。6層はローム粒子が多く10mm大以下のロームブロックを多く含む。粘性があり、しまりは弱い。5・6層は床下土坑と考えられる。7層は暗褐色土で焼土粒子を多く、炭化物を少量含み、ローム粒子を多く含む。粘性がありしまりは堅い。カマドの一部と考えられる。8層はローム粒子が多く、粘性はあるがしまりはない。

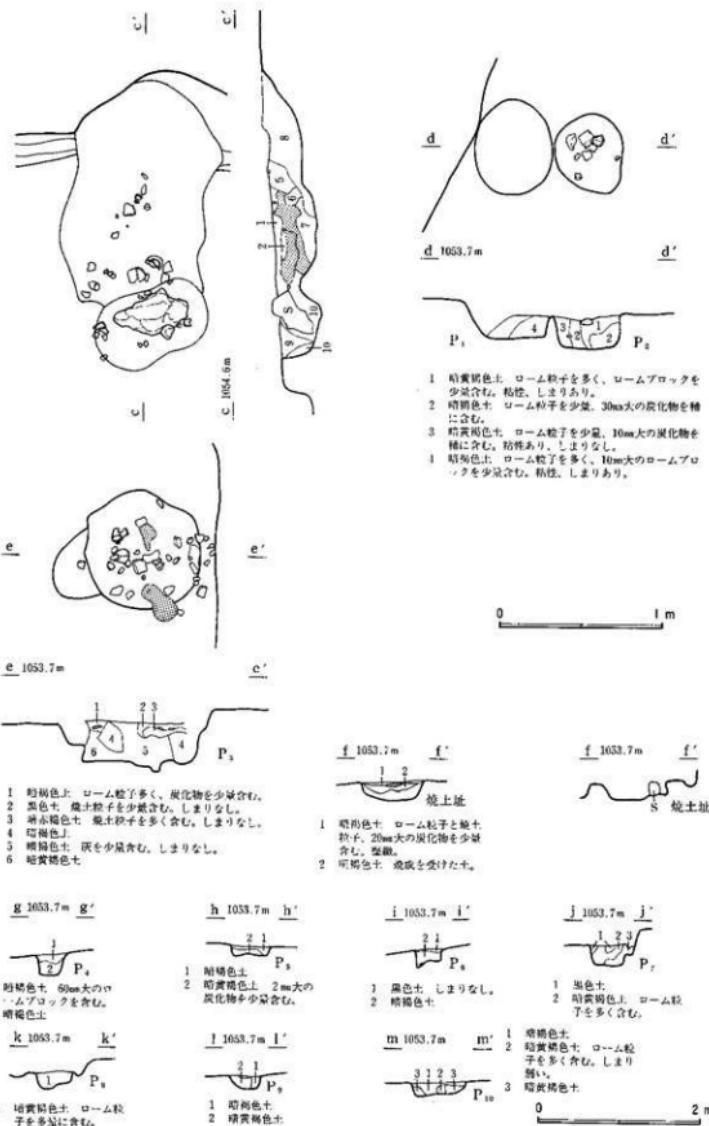
カマドは住居址の北側のはば中央に位置する。住居址の壁をカマドの全長の約1/4掘り込んで構築されている。カマドは原形を止めではないが、周辺に石や粘土の散布が見られることから、石組粘土カマドであると考えられる。煙道は明確ではないがカマドの構造より奥より急角度に壁際に上がり、住居の外に煙が排出されていたことが考えられる。カマドに堆積する焼土の厚さは、10cmである。カマドの前の部分には穴があり、47cmの大きく黄色の輕石状の礫と土器片が数点出土している。カマドの上層は10層に分層できた。1層は黒色土でローム粒子を少量含み、5mm大の炭化物を少量含む。粘性、しまりなし。2層は暗褐色土でローム粒子を多く、焼土粒子、粘土粒子と20mm大の粘土ブロックを少量含む。3層は橙色の焼土で縮まりが強く粘性がある。4層は赤色の焼土で、縮まりが堅く粘性がある。5層は赤褐色土でローム粒子と粘土粒子を少量含む。6層は暗褐色土でローム粒子を多く含み、焼土粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。7層は暗褐色土でローム粒子を多く含み、20mm大のロームブロックを稀に焼土粒子を少量含む。8層は暗黄褐色土でローム粒子が多く、30mm以下のロームブロックを少量含み、粘性としまりがある。

東壁のやや南寄りに焼土址が検出された。この焼土址は3cmの厚さを持つ焼土である。前述のカマド以前に使用されたカマドとも考えられるが、壁面よりやや内側にあり、煙道もなく、拡張前のプランを確認することができなかつたため、カマドとはしなかった。焼土址を掘りあげると20cm大の長方形の礫が地山に突き刺さるように検出している。焼土址とP₁の間には灰や焼土の散布が見られるため、焼土址の灰はここに書き出されたものであると考えられる。

床下土坑は12基検出している。柱穴は明確ではないが、柱穴と考えられるものに、P₂・P₃・P₄・P₅・P₆・P₇・P₈・P₉・P₁₀が考えられる。しかし、本数が多いためすべてが柱穴とは考えにくい。P₁は多くの土器片や焼土が検出されているため、焼土址の灰撒き穴であったことが考えられる。P₁₁は焼土などが散布している下部より検出され、底面が明らかでない土坑であるが、中より土器片を多く検出した。また、灰の検出が見られるため、灰撒き穴として使用された可能性がある。



第10図 B区 1号住居地 (1/60)



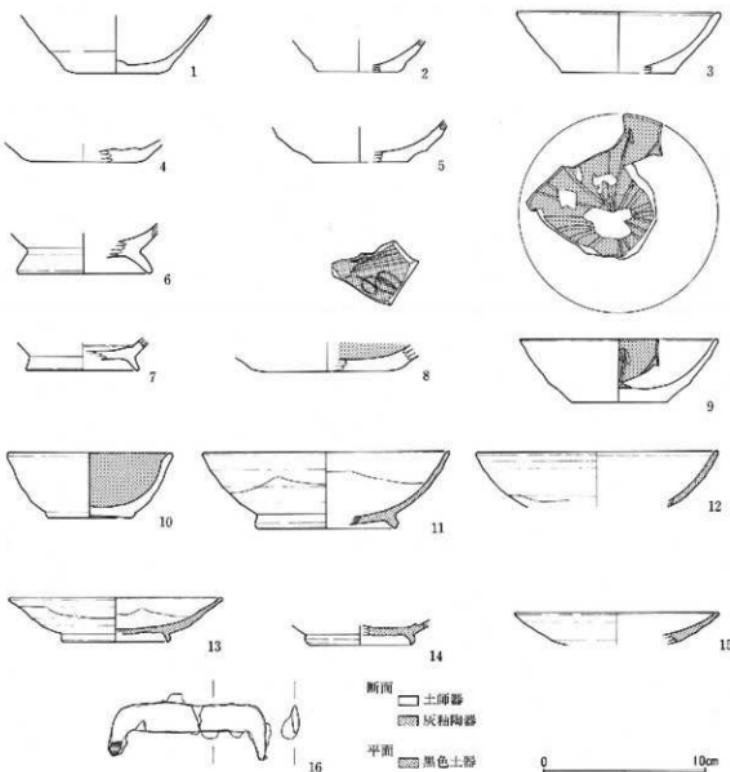
第11図 B区1号住居址 (カマド・P₁~P₃1/30, 焼土量・P₄~P₁₀1/60)

遺物の出土状況 遺物は住居址に広く散布している。特にカマド内やその周辺やP₁やP₂の周辺で多く検出されている。供膳具は土器付環11個体以上、高台付環2個体以上、黒色土器環3個体、灰釉陶器碗2個体以上、皿3個体以上、煮沸具は羽蓋と長胴甕の破片が出土しているが、復元できるものはない。その他に焼土址の南側から灰や焼土の散布している中より麻皮剥器が出土した。

土器付環、高台付環は、ほとんどが焼成が良好なものが多く、しっかりしている。胎土中に長石などを含むものは少ない。成形はいずれも回転輥轆引きで、底部すべてに糸切り痕が残っている。高台付環は付け高台である。

黒色土器は環のみ出土し、高台付環や皿は見ることができない。図示した資料以外の破片は少なく、いずれも同一個体と考えられる。暗文が施されているものが多い。

灰釉陶器は、いずれも胎土中に不純物をほとんど含まず、色調は白色から明るい灰色である。底部の糸切り痕は整形され、残っていない。13のみが、糸切り痕が残る。釉薬はすべて濁け掛けである。



第12図 B区1号住居址出土遺物(1/3)

方形柱穴列（第13図、図版2-7）

B区c-4グリットの北寄りに位置している。

本址の平面形は長方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、長辺となる北辺が4.12m、南辺が4.26m、短辺となる東辺が3.10m、西辺が3.06mを測る。面積は約12.9m²を測る。東から西の方向へ長軸をもち、長軸方向はN-68'-Eを示す。

柱穴はP₁からP₆の6本で構成される。柱穴の平面形はほとんどが円形であるが、P₁₃の平面形は不整形である。確認面からの柱穴の深さは、P₁が32cm、P₂が28cm、P₃が30cm、P₄が44cm、P₅が30cm、P₆が38cmで、6本の平均は約34cmである。

遺物の出土が見られないため、帰属時期は明確ではないが、土層から縄文時代である可能性が考えられる。

掘立柱建物址（第14図）

B区c-3グリットに位置している。

本址の平面形は方形を呈する。柱穴の間隔は、北辺1.50m、南辺1.54m、東辺1.76m、西辺1.64mを測る。面積は2.584m²である。長軸方向はN-10'-Eである。柱穴はP₁からP₄の4本で構成される。柱穴はすべて円形である。

遺物の出土がないため、明確な時期は不明であるが、土層が漆黒土であるため、近世以降の遺構であろう。

焼土址（第16・22図、図版2-8）

B区b-3グリットに位置している。25cm×22cmの範囲で焼土が検出された。焼土の周辺より平安時代の遺物が出土している。遺物は第22図1の土師器壺、2の灰釉陶器の皿の他、黒色土器壺の破片も出土している。

土坑

発掘区のほぼ全域にわたって検出されている。土坑番号については、番号を付した後に人為的に構築された土坑でないと判断し削除したものもあり、また、方形柱穴列などの柱穴となったものもあるために、土坑の番号は連続していない。

1号土坑（第15図、図版3-1） 長径138cm、短径120cm、深さ102cmで、大型の土坑である。主軸方向はN-53'-Wを示す。平面形は横円形で、断面形は樽状である。掘り方はかなりしっかりとしている。底面は平坦である。土坑の底面より第21図1の縄文時代中期後半の土器片の他、同時期の土器片及び、黒曜石の細片が出土している。

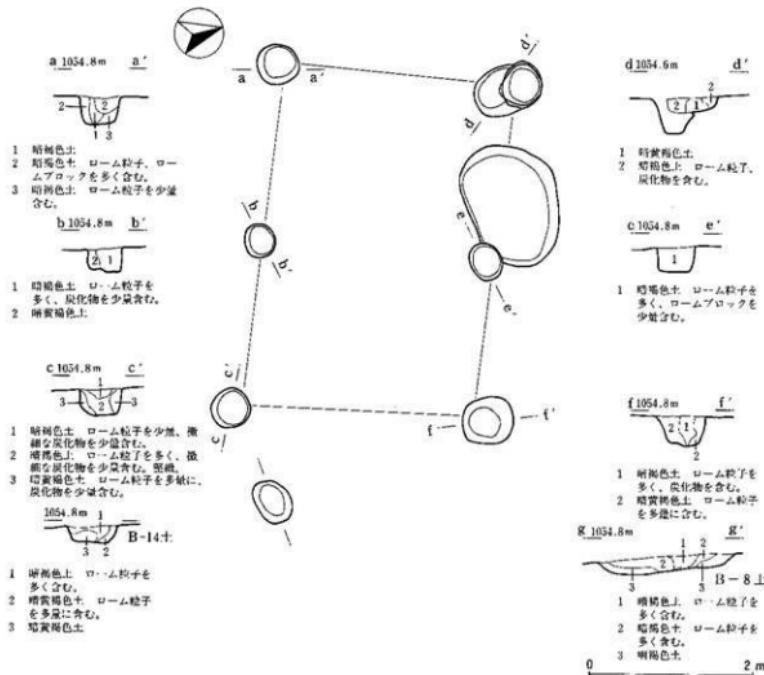
3号土坑（第15図、図版3-2） 長径92cm、短径86cm、深さ41cm、主軸方向はN-0°を示す。平面形は隅丸方形で、断面形は樽状である。掘り方はしっかりしている。底面は平坦である。

4号土坑（第15図、図版3-3） 長径148cm、短径134cm、深さ74cmの大型の土坑である。主軸方向はN-22'-Eを示す。平面形は横円形で、断面形は一部巾着状となっている。掘り方はかなりしっかりしている。

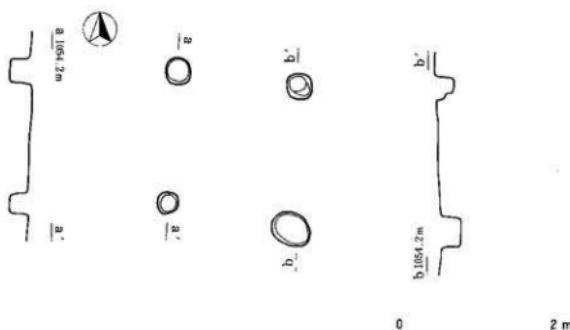
5号土坑（第15図） 長径112cm、短径110cm、深さ28cm、主軸方向はN-71'-Eを示す。平面形は不整円形で、断面形は皿状である。

6号土坑（第15図） 長径102cm、短径80cm、深さ27cm、主軸方向はN-55'-Eを示す。平面形は横円形で、断面形は盤状である。

7号土坑（第13図） 1号方形柱穴列のP₄と重複している。P₄より新しい土坑と考えられる。深さは17cm



第13図 B区1号方形柱穴列 (1/60)



第14図 B区据立柱建物址 (1/60)

で、平面形は不整形圓形で、断面形は皿状である。

8号土坑(第13図) 長径157cm、短径115cm、深さ20cm、主軸方向はN-80°-Eを示す。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

14号土坑(第13図) 長径58cm、短径42cm、深さ19cm、主軸方向はN-65°-Eを示す。平面形は楕円形で、断面形は皿状である。

15号土坑(第15図) 長径46cm、短径40cm、深さ29cm、主軸方向はN-0°を示す。平面形は不整形で、ピット状である。

16号土坑(第15図) 長径65cm、短径58cm、深さ18cm、主軸方向はN-0.5°-Eを示す。平面形は円形で、断面形は皿状である。

17号土坑(第15図) 長径115cm、短径62cm、深さ26cm、主軸方向はN-35°-Wを示す。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

18・19号土坑(第15図) 18号土坑は推定であるが、長径160cm、短径100cm、深さ20cm、軸線方向はN-41°-Wを示す。平面形は楕円形で、断面形は皿状で、あまり掘り方のしっかりしていない土坑である。19号土坑を掘り込んで構築されている。19号土坑は掘り方がとても曖昧である。深さは18cmで平面形は不整形で断面形は皿状である。ロームマウンドの可能性も考えられる。

20号土坑(第15図) 長径82cm、短径67cm、深さ20cm、軸線方向はN-88°-Eを示す。平面形は楕円形、断面形は皿状である。

22号土坑(第15図) 長径77cm、短径65cm、深さ37cm、主軸方向はN-7°-Wを示す。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

23号土坑(第15図) 長径65cm、短径58cm、深さ18cm、主軸方向はN-36°-Wを示す。平面形は円形で、断面形は皿状である。

24号土坑(第15図) 長径120cm、短径83cm、深さ32cm、主軸方向はN-62°-Wを示す。平面形は長楕円形で、断面形は皿状である。

25号土坑(第15図) 長径53cm、短径51cm、深さ14cm、主軸方向はN-43°-Eを示す。平面形は円形で、断面形は皿状である。

26号土坑(第16図) 長径104cm、短径94cm、深さ32cm、主軸方向はN-59°-Wを示す。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

27号土坑(第16図、図版3-4) 長径95cm、短径79cm、深さ27cm、主軸方向はN-8°-Wを示す。平面形は楕円形で、断面形は皿状である。

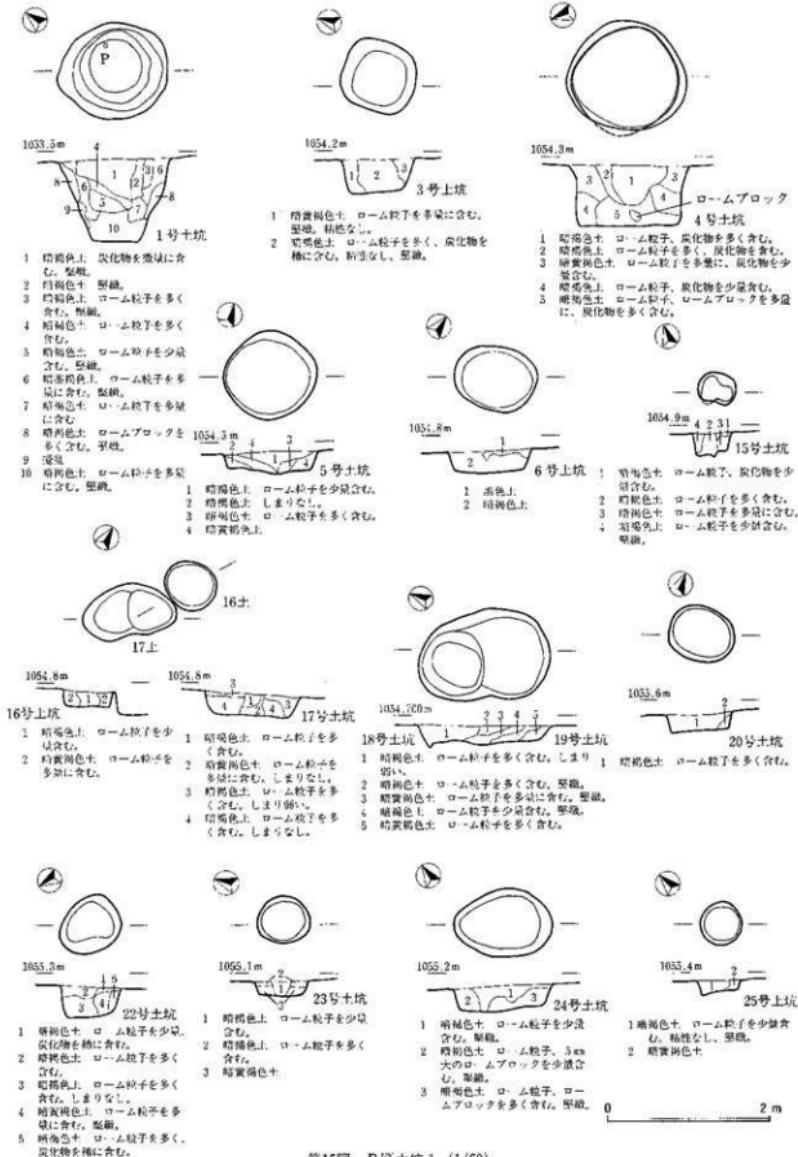
28号土坑(第16図) 長径73cm、短径55cm、深さ30cm、主軸方向はN-38°-Wを示す。平面形は楕円形で、断面形は皿状である。

29号土坑(第16図) 長径153cm、短径89cm、深さ27cm、主軸方向はN-36°-Wを示す。平面形は不整形、断面形は皿状である。

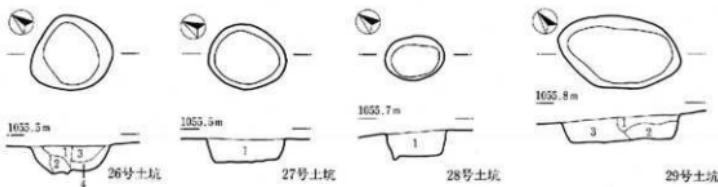
30号土坑(第16図) 長径66cm、短径57cm、深さ28cmを測り、主軸方向はN-9°-Eを示す。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

31号土坑(第16図、図版3-5) 長径45cm、短径45cm、深さ26cmを測り、主軸方向はN-5°-Wを示す。平面形は円形で、ピット状の土坑である。

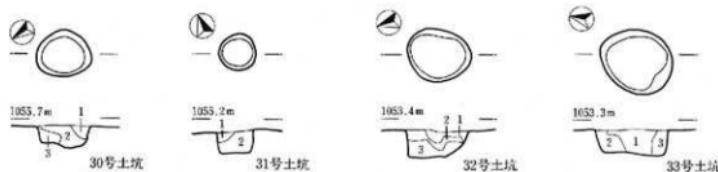
32号土坑(第16図) 長径80cm、短径64cm、深さ34cmを測り、主軸方向はN-30°-Eを示す。平面形は楕円形



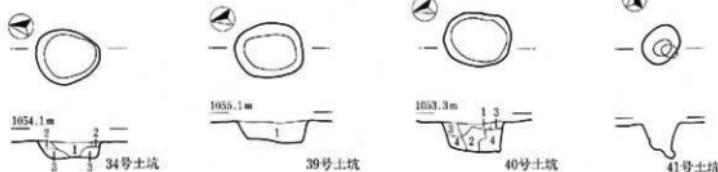
第15図 B区土坑 1 (1/60)



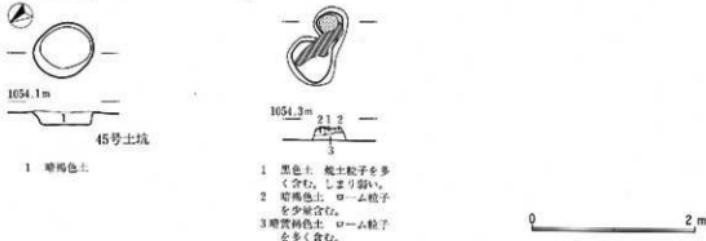
1. 明褐色土、炭化物を稀に含む。
2. 明褐色土、ローム粒子、ロームブロックを多く、炭化物を少量含む。
3. 明褐色土、ローム粒子を少量、微細な炭化物を稀に含む。
4. 明黄褐色土。
1. 明褐色土、ローム粒子を多く含み、炭化物を少量含む。
2. 明褐色土、ローム粒子を多く含む。
3. 明褐色土、ローム粒子を多く含む。ロームブロックを少許含む。
1. 明黄褐色土、ローム粒子を多く含む。
2. 明褐色土、ローム粒子を多く含む。
3. 明褐色土、ローム粒子を多く含む。



1. 明褐色土、ローム粒子を多く含む。
2. 明黄褐色土、ローム粒子を多く含む。
3. 明黄褐色土、ローム粒子を多量に含む。
1. 明褐色土、ローム粒子を多く含む。しまりなし。
2. 明黄褐色土、ローム粒子を多量に含む。
1. 明褐色土、ローム粒子を少く混含し。しまり悪い。
2. 明褐色土、ローム粒子を多く含む。炭化物を少量含む。
3. 明黄褐色土。
1. 明褐色土、ローム粒子を多く含む。
2. 明黄褐色土、ローム粒子を多く含む。



1. 明褐色土、ローム粒子を多く、炭化物を少量含む。しまり弱い。
2. 明褐色土、ローム粒子を多く含む。
3. 明黄褐色土、ローム粒子を多量に含む。
1. 明褐色土、ローム粒子を多く、炭化物を少量含む。しまり弱い。
1. 黒色土、炭化物を稀に含む。しまり弱い。
2. 明褐色土、ローム粒子を多く含む。しまりなし。
3. 明黄褐色土、ローム粒子を多量に含む。堅硬。



1. 黒色土、粒状粒子を多く含む。しまり弱い。
2. 明褐色土、ローム粒子を少許含む。
3. 明黄褐色土、ローム粒子を多く含む。

0 2 m

第16図 B区土坑2および焼土坑(1/60)

で断面系は不整形である。

33号土坑(第16図) 長径92cm、短径78cm、深さ31cmを測り、主軸方向はN-13°-Eを示す。平面形は楕円形で断面形は盤状である。

34号土坑(第16図、図版3-6) 長径78cm、短径67cm、深さ19cmを測り、主軸方向はN-0°である。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

39号土坑(第16図) 長径82cm、短径57cm、深さ24cmを測り、主軸方向はN-0°である。平面形は隅丸長方形で、断面形は盤状である。

40号土坑(第16図) 長径72cm、短径56cm、深さ34cmを測り、主軸方向はN-8°-Wを示す。平面形は不整形で、断面形は盤状である。

41号土坑(第16図) 長径51cm、短径40cm、深さ44cmを測り、主軸方向はN-45°-Eである。平面形は楕円形で、ピット状の土坑である。

45号土坑(第16図) 長径75cm、短径65cm、深さ15cmを測り、主軸方向はN-15°-Eを示す。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

以上の土坑は4群に分類することができる。

I群 しっかりした掘り方を持ち、非常に深い土坑で、基本的には三角堆土である。断面形は樽状であり、口徑に向かって開いている。この群は断面形と深さにより次の3類に分類できる。

1類 非常に深い土坑で、断面形が盤状の土坑である。上層は数層に分かれ、壁面が崩れたような上層が見られる。これらからもとは巾着状の土坑であった可能性があり、この特徴を持った土坑は1号土坑のみである。

2類 1類とほとんど同じ特徴を持つが、1類に較べて底部が広く、断面形が明確な巾着状である。この特徴を示すのは4号土坑である。

3類 掘り方がしっかりしているが、1・2類に較べると非常に規模の小さい土坑である。この土坑は1次調査で4類とした土坑である。本址では3・16・23・26・33・40号土坑がこれに当たり、菖蒲沢A遺跡では多く見られる土坑である。

II群 あまり掘り方がしっかりしていない、浅い土坑である。上層が基本的に1層である。これは断面形により2類に分かれる。

1類 断面形が盤状の土坑。6・17・20・24・27・28・39・45号土坑がこれに当たる。

2類 断面形が皿状の土坑。5・8・18・19・25・34号土坑がこれに当たる。

III群 ピット状の土坑である。何らかの柱穴とも考えられるが、対応する土坑がないので、単独の土坑とも考えられる。14・15・30・31・41号土坑がこれに当たる。1次調査の報告書では5類に分類している。土坑からは時期がわかる遺物の出土はほとんどなかった。わずか1号土坑が中期後半とわかっただけである。用途としては、5号土坑が形態から貯藏穴として使用されていたのではないかと考えられるのみで、他の土坑の用途は全く不明である。1群3類は1次調査では、トーテムポール様の柱が立っていたのではないかと想定した。B区も同様な性格の土坑ではないかと考えられる。本址で特徴的なのは、掘り方のしっかりしない土坑群である。これらの土坑は掘る以前のプランはある程度わかるのだが、掘り進めていく内に壁が出ないというもので、人為的な土坑でないか非常に難しく作られた土坑であることが考えられる。

第3節 出土した遺物

1. 縄文時代の遺物（第17~21図）

A区での縄文時代の遺物は、住居址で出土している他はa・b-4・5・6グリットとb・c-13・14・15グリットで多量の遺物の出土があった。時期は多岐にわたっており、以下に述べてくように縄文時代早期から後期初頭までの資料が出土している。中期後半の遺物は焼土址1や集石1に伴う遺物であったことも考えられる。

第17図1から10までは早期の押型文土器である。1から6までは山形文である。いずれも破片のため、全容はわからないが、1・2は横位に、4・6は縦位に、3は縱横位に施文されている。1と6は口縁部まで残っており、口縁部にまで山形文が施文されている。薄手の土器である。7から10は楕円文である。山形文に較べるとやや厚みのある上器である。第20図74の石器は三角形の断面を持ち、疊の縁辺が磨かれており、長櫛の断面に敲打痕が見られる。これらの形状と特徴から、早期に出土する特殊磨石であることが考えられる。これらの遺物はすべてa・b-4・5・6グリット付近で検出されている。当該時期の遺物は前回の調査でも検出されている。

11・12・13は微量な纖維を含む土器である。いずれも器面荒く、剥落が激しい。14・15・16・19・20は縄文を地文に持ち、胎土中に纖維を含むものである。17・18は複節の縄文である。纖維を含み、縄文を地文に持つことから前期初頭から前半の上器であると考えられる。図示はしなかったが、無文の指頭圧痕の残る中越式に比定できる上器も見られる。前期の土器は数量は少ないが、A区全域にわたって検出されている。当該期の遺物は前回の調査では8号土坑より出土しており、中越式期の土器が出土している。

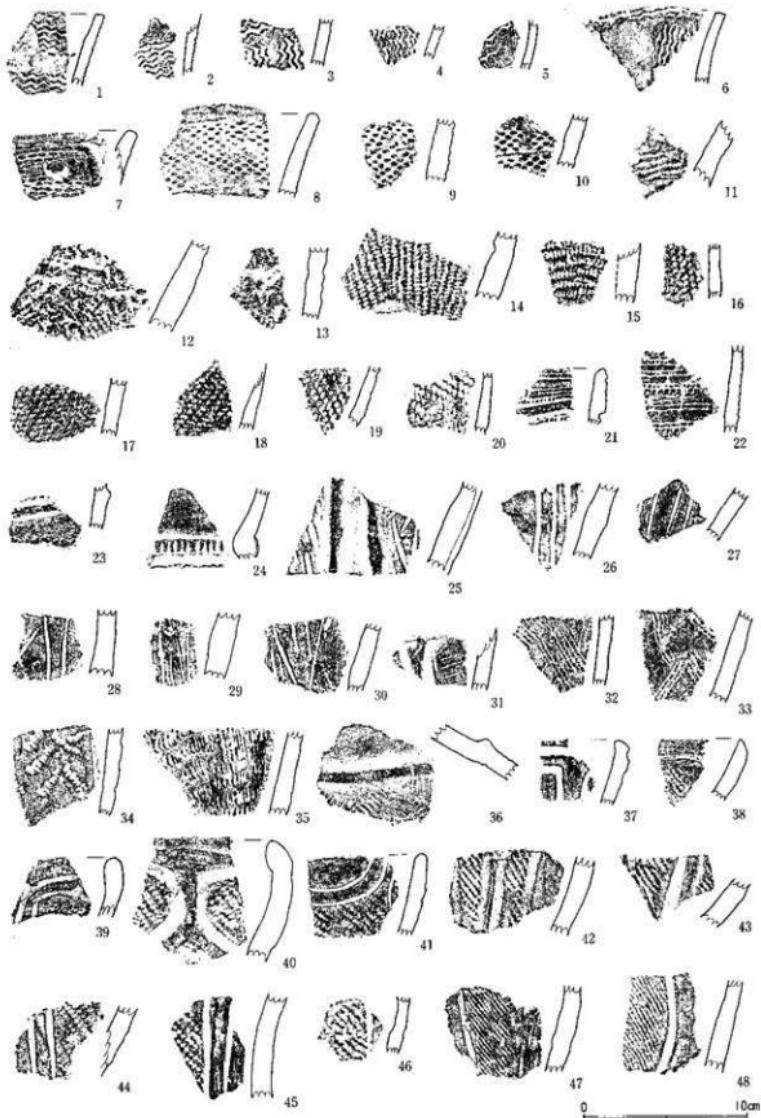
21・22の土器は薄手の土器で、半割竹管状工具による平行沈線を横位に用い、結節状沈線が加わる施文を持つものである。これにより、中期初頭の上器であることが考えられる。中期初頭の上器は、すべてb・c-14・15より出土している。

23は胎土が堅く二条の沈線を持ち、24は胎土が堅く二条の平行沈線を横位に用い、沈線間のネガティヴな隆帯に連続爪形文を施文している。この二つの上器は中期中葉期であると考えられる。

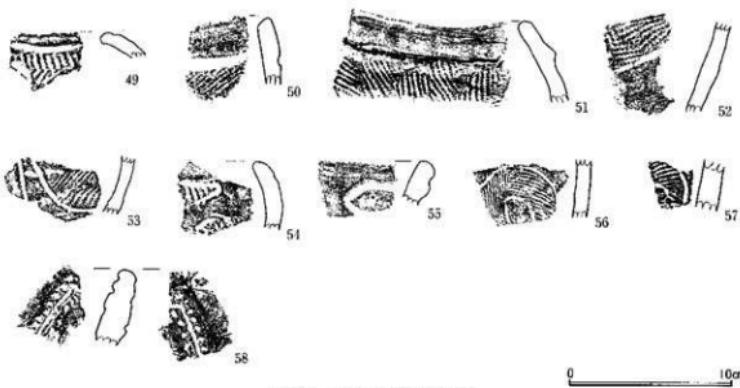
25から58までは中期後半の土器である。25は地文に矢羽状の沈線を施し、隆帯によって区画している。26・27・28・29・30は沈線を縱または斜めの方向に用いたもので、矢羽状沈線の一種ではないかと考えられる。31は沈線によって区画し、その内部に横位の短い沈線を施文したものである。32・33は細い条線を用いたものである。33は三条の条線による矢羽状沈線である。34も矢羽状沈線の影響を受けたものと考えられ、刺突によって矢羽状の模様を作り出しているものである。35は器面のほぼ全面に細かい列点施文したものである。36は地文に細かい沈線を施し、低い隆帯で上面を区画している。以上の上器群は沈線を主体とする一群である。

38から54までは沈線による区画を持ち、その内部に縄文を充填させるものである。50は全面に縄文を施し、口縁部付近を低い隆帯で区画し、口縁部を無文とするものである。以上の土器群は縄文を主体とする一群である。前者は曾利系の上器であり、後者は加曾利E系の土器と考えられる。これらの遺物は以上に述べた特徴から曾利IV式期からV式期のものと考えられ、住居址の時期と一致している。また、検出範囲はA区全面である。以上の遺物の他に、58が出土している。これは上器の把手であり、中央に沈線を施し、沈線の両側に刺突を施している。当該期の遺物は前回の調査でも造構外で検出されている。

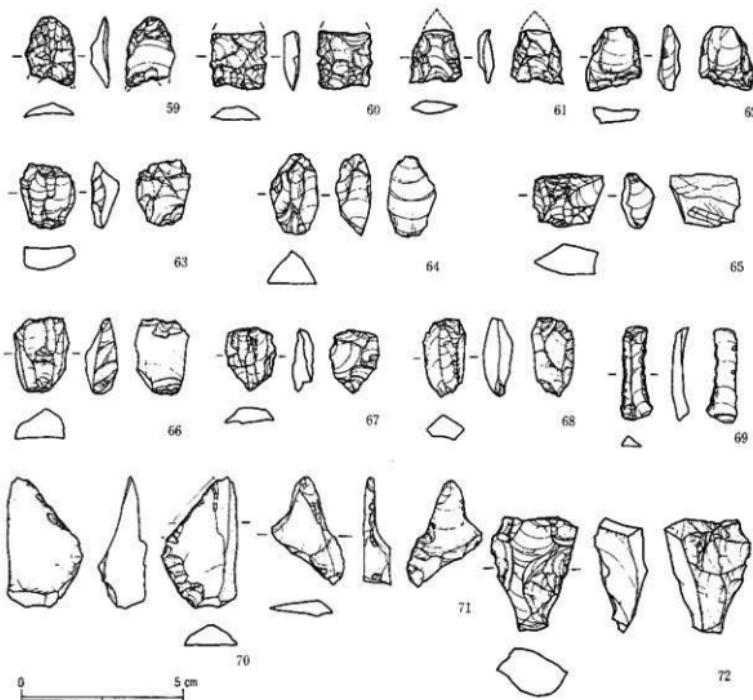
56・57は細い曲線の沈線の中に縄文を充填するものである。細かい破片なので全体像は不明であるが、曲線が逆「J」字であれば後期初頭の称名寺期の土器であると考えられる。



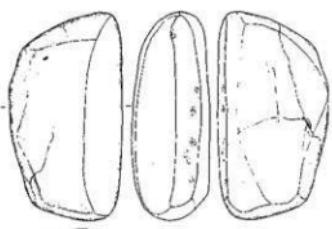
第17圖 A区出土遺物(1) (1/3)



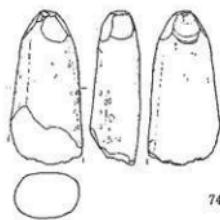
第18図 A区出土遺物(2) (1/3)



第19図 A区出土遺物(3) (2/3)



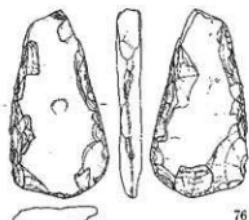
73



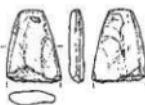
74



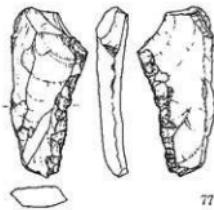
73



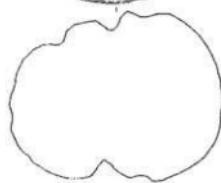
76



75



77

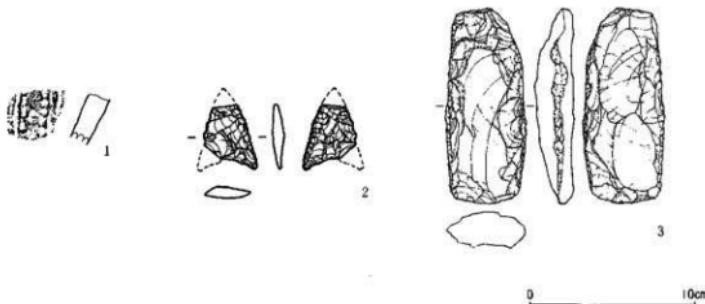


78

0 10cm

第20圖 A区出土遺物(4) (1/3)

土器の他に、多量の黒曜石の破片が検出されている。黒曜石の石器は破片がほとんどであり、石鏃は未製品ばかりである。b-5グリットから78の10.5cm大の黒曜石製のスクレイバーが出土している。このスクレイバーは赤みを帯びた黒曜石によって作られている。黒曜石の石器の他には75の磨製石斧や76・77の打製石斧が検出されている。75はb-5グリットより、76・77はb-13・c-14より出土している。b-14の焼土址1付近より78の蜂の巣石が検出されている。

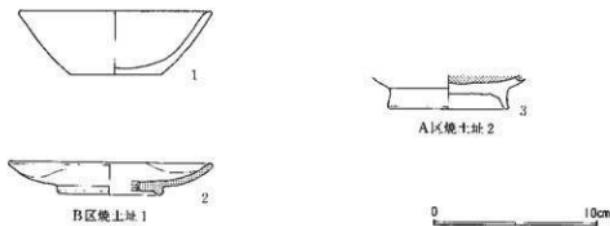


第21図 B区出土遺物 (1、3は1/3、2は2/3)

B区出土の縄文時代の遺物の数は少ない。出土したのは第21図1の1号土坑中から出土した中期後半の土器片と、2のB-1号住居址より出土した石鏃、3の打製石斧である。2については平安時代の住居址の中から検出されているため、平安期に持ち込まれている可能性が十分考えられる。3は造標外で検出された打製石斧である。打製石斧が検出されたB区c-5グリット付近は細かな土坑があるだけなので、土坑を掘るときか、またこのB区が生産域であり、耕作に使用された可能性が考えられるが、定かではない。

2. 平安時代の遺物 (第22図)

平安時代の遺物はA区で焼土址2に伴うものと、B区で焼土址に伴うものとがある。出土した資料はとともに、土器、黒色土器、灰釉陶器が出土している。しかし破片ばかりで、図示できたのは第22図の3点のみである。



第22図 平安時代出土遺物 (1/3)

第V章 結 語

本址では縄文時代の遺構は中期後半しか検出することはできなかったが、遺物は早期から後期まで検出することができた。前回の調査では、早期押型文土器、前期前半の中越式期の土器、前期後半の諸磯C式期、十三菩提式期の土器、後期前半の上器が検出されている。今回も早期押型文の土器片が検出され、出土位置も、A区a・b-4・5・6グリッドよりまとめて検出している。早期は与助尾根遺跡で出土し、八ヶ岳西南麓で点々と土器のみ出土するケースが近年非常に多くなっている。

前期は前半を中心に織維土器を主体として検出されている。前回の調査では中越式期の土器が8号土坑より検出されており、今回前期が出土しているA区とは近接しているため、同時期の遺物であるのではないかと考えられる。前期前半は与助尾根南遺跡で住居址が検出されており、本址との関係が注目される。

もっとも多く出土したのは、中期後半の土器で、A区全体にわたって出土している。ほとんどの土器は住居址と同じ曾利V式である。近隣の与助尾根、尖石遺跡を見ると、曾利V式期の住居址は現在まで2軒しか検出されておらず、非常に数が少なくなっている。菖蒲沢A遺跡は尖石の住居址が減少していくことに何らかの関係があるって成立したのではないかと思う。

B区では、住居址などの生活遺構が発見されず、不明瞭な土坑と、方形柱穴列が検出され、遺構外で打製石斧2点が出土した。前述したように、B区は耕作を行っていた生産域である可能性がある。

本遺跡で検出されたのと同様の小規模な平安時代の集落は、近年、八ヶ岳西南麓で多く見られようになつた。本址の平安時代のA区焼土址2、B区焼土址は住居址のプランが検出できなかつたため焼土址としているが、住居址のカマドであった可能性が十分考えられる。また、試掘時に検出された住居址も含めて考えると、4軒の住居址が本址には存在していたことがいえる。住居址の配置を見ると、住居址の間隔は近接せず、A区2号焼土址とB区1号住居址は異なる台地に位置し、また、B区のある同じ台地上に住居址2軒と焼土址1基があり、1号住居址と焼土址間が近接している他は離れている。

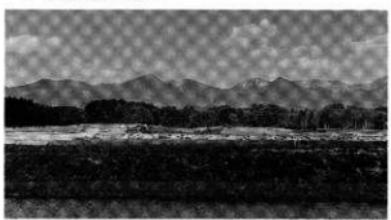
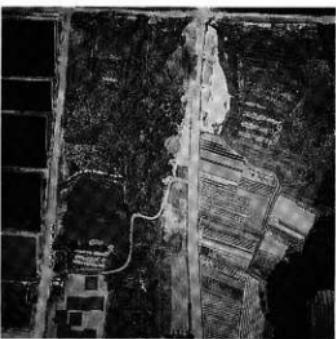
この集落の形態は、稗田頭A遺跡を中心とする鶴田・稗田頭C遺跡の住居址の在り方によく似ている。時期も、出土遺物から、ほとんど稗田頭A遺跡と変わらないため、本址は同様の性格をもつた遺跡であると考えられる。以前に『稗田頭A遺跡』で、11世紀初頭の稗田頭A遺跡などの平安時代集落が八ヶ岳西南麓に見られる要因として、麻の栽培を主とする畑作を目的として進出したことを述べた。今回の調査でB区1号住居址から麻皮剥剝器が検出されたことによって、稗田頭A遺跡の調査結果の裏付けとなつたと思う。

本遺跡は、縄文時代については、近隣にある尖石・与助尾根遺跡との関連の中で考えていかなければならぬ遺跡であるため、現在行われている尖石遺跡の試掘調査とともに、再度検討していかなければならない。

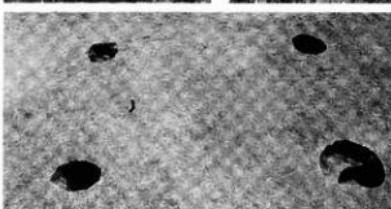
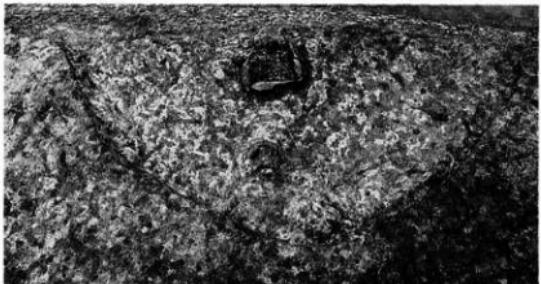
参考文献

- 宮坂虎次 1986 「第二章 縄文時代」 『茅野市史』上巻 茅野市
小池岳史 1994 『立石遺跡』 茅野市教育委員会
功刀司・柳川英司 1995 『稗田頭A遺跡』 茅野市教育委員会
柳川英司 1995 『菖蒲沢A遺跡』 茅野市教育委員会

図 版



5 A区1号住居址 ▶
(北より)



図版－2



1 A区焼土址1 (北より)



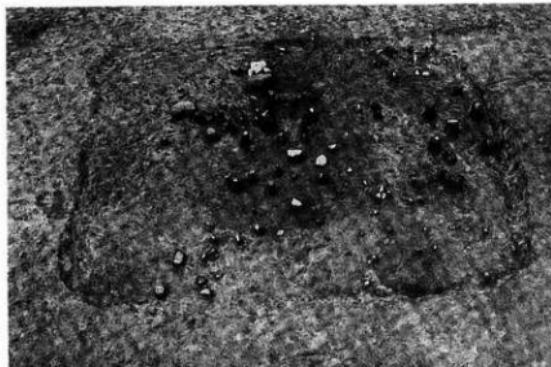
2 A区焼土址2 (北より)



3 B区遠景 (東より)

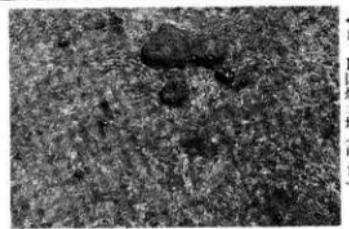
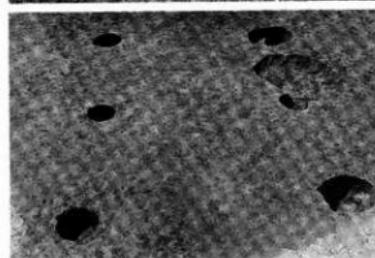


4 B区遠景 (東より)



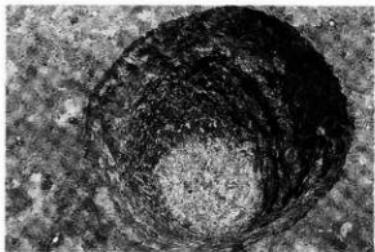
◀ 5 B区1号住居址
(南より)

▼ 6 B区1号住居址
カマド (南より)

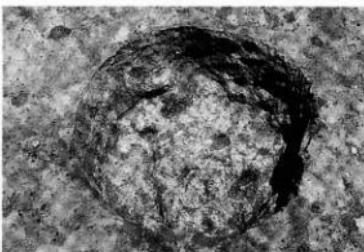


◀ 7 B区1号方形柱穴列 (東より)

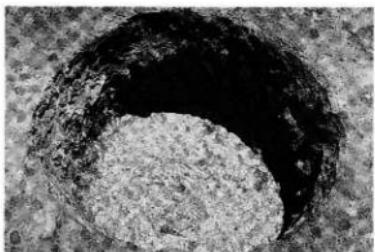
8
B区焼土址 (南より)



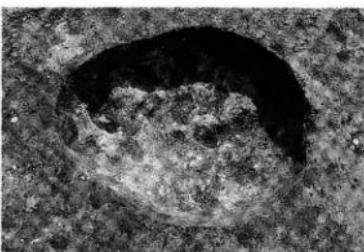
1 B区1号土坑（南より）



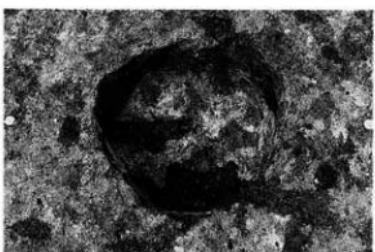
2 B区3号土坑（西より）



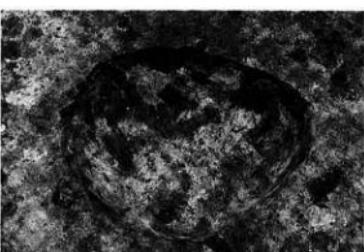
3 B区4号土坑（北西より）



4 B区27号土坑（東より）



5 B区31号土坑（北より）



6 B区34号土坑（西より）



7 建設現場代理人研修会



8 発掘に携わった方々

報告書抄録

ふりがな	しょうぶざわA いせき
書名	菅蒲沢A遺跡
副書名	平成7年度県営圃場整備事業堀地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	柳川 英司
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391 長野県茅野市塙原二丁目6番1号 TEL(0266)72-2101
発行年月日	西暦1996年3月20日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
菅蒲沢 A	長野県茅野市 湖東 堀 豊平 南大塩	20214	204	36°00'	138°14'53"	1995年5月23日 8月4日	3,590m ²	県営圃場整備 事業堀地区に 伴う発掘調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
菅蒲沢 A	集落址	縄文時代 中期 平安時代	縄文時代中期 住居址1軒 方形柱穴列 2基 焼土址1基 土坑31基 平安時代 住居址1軒 焼土址2基 近代 掘立柱建物址 1軒	縄文時代 早期、前期、 中期、後期、 土器、石器 上師器環・高台付 环、甕、黑色土器 环・高台付环、灰 釉陶器碗・皿麻皮 剥器	

菖蒲沢A遺跡

—— 平成 7 年度狹富圓場整備事業地区に
伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

平成 8 年 3 月 18 日 印 刷

平成 8 年 3 月 22 日 発 行

編 集 茅野市教育委員会
発 行 長野県茅野市原二丁目 6 番地 1 号
☎ (0266) 72-2101㈹
印 刷 はおざき書籍株式会社
長野県長野市柳原 2133-5
☎ (026) 244-0235㈹

